

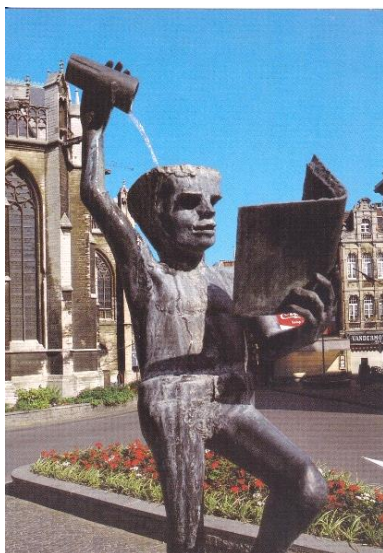
留学の思い出 -10 回読め-

武田薬品工業株式会社 医薬研究本部
井村良視

今は昔。ベルギーのルーヴェン大学留学中の事です。ラッキーにもデータがまとまり、国際血栓止血学会で発表することになりました。抄録を書き上げて Désiré Collen 教授の部屋へ持っていった時、Collen 先生は Roger Lijnen 先生と一緒に机の上に山のように積まれた抄録をチェックされているところでした。“まずいなあ”と思ったら案の定、



ルーヴェンのマルクト広場から市庁舎を望む(市庁舎は右の建物)



ルーヴェンはビールと学生の町
ルーヴェン大学の学生はビールを浴びながら勉強する?

Roger から「Yoshi、おまえも加われ」「やっぱりきたか」。そして、私の抄録の番。なんか嫌なんですよねえ、この雰囲気。ドキドキしていると、スペルミスが見つかって Collen 先生の修正が入った。“しまった”と思うが早いか、「Yoshi、10 回読んでこい！」と、Roger の雷が落ちた。この、Roger という人、普段は温厚でめったに声を荒げる事はないんです。しかし、この時はすごく怖い顔をして怒ったので、ずっと気になっていました。

その理由がわかったのは約半年後、Collen 先生に論文を校閲してもらった時でした。先生に時間ができたら、「Yoshi、ちょっと来い」と電話がかかって来る。「はいはい、わかりました。直ぐに行きまあ〜す」。実験ノートを片手にそそくさと教授室へ。先生は、声を出して読みながら文章に手を加えていく。私は、それを横で見ている。理解できない箇所があると「これはどういう意味や?」「こういうことです」。時には、先生、論文を読むのをやめ

○目次

巻頭言	P1
理事会および総会報告	P3
お知らせ	P6

て、腕組みして考え出す。そして、「Yoshi、オレは信じないぞ。この結論は間違ってる」。“やめてくれ、マジでそんなこと言われたら焦るやんけ” と思いながら「いいえ、これは正しいんです。データはしっかりと示しています」と、生データを見せて説明する。(先生が私の説明に納得してくれたときは嬉しかったなあ。なんか、先生との勝負に勝ったような気がしました)。そして先生が文章を修正する。この過程を一つの文章について数回繰り返すことで、私の拙い英語が洗練された英語に変わっていくんです。驚いたのは、Tableのタイトルを校閲されている時でした。たった1行のタイトルを先生は繰り返し読んで修正し、修正した文章を更に読み返しては修正を加えているんです。自分が納得できるまでそれを繰り返しておられる。私も留学するまでに4報ほど英語論文を書いていて、一応、論文の書き方は知っているつもりでしたが、



一緒に実験していた仲間と(前中央が著者)

一つ一つの文章がこれほどまでに吟味されたものであるのを知り、今までの自分が恥ずかしくなりました。そして、はたと思い当たったんです。Roger があの時、怖い顔をして「10 回読め」といった理由に。Roger は Collen 先生の門下生として当然その薫陶を受けており、それを私に伝授してくれたんです。『お前、この抄録を読み手の視点になって何回も何回も読み返してみたか？ 読んでへんやろ。せやから、こんな簡単なスペルミスに気がつけへんのや』と。それを「10 回読め」という言葉で表現したんです。

それ以後、文章を書く時には Roger の言葉を思い出し、一度書いた文章を読み手の立場で何回も読み返して完成させるように心がけています。

おわりに

科学の進歩は日進月歩。留学時代の知識や技術は数年で色あせてしまいました。しかし、今も輝き続けているものがあります。その一つがここで取り上げた「10 回読め」です。そのおかげで私は 20 年間にわたって曲がりなりにも研究者としてやってこられました。実践を通してその大切さを教えてくださった Collen 先生と Roger に対して今でも感謝の気持ちでいっぱいです。Roger がこの文章を読んだらどう思うだろうか。また言われそうです。



Collen 研の当時の留学生らと(右から3人目が Collen 先生)

「Yoshi、10 回読んだか？」